

フィリピン 2006 年に出国した出稼ぎ労働者が 100 万人を突破 アジアの出来事 アジア

海外研究員 [鈴木 有理佳](#)

海外出稼ぎ労働者が多いことで知られているフィリピンだが、2006 年に出国した労働者数が史上初めて 100 万人を突破し、約 109 万人であった。ここ数年間の推移をみると、2004 年に初めて 90 万人を超えて 93 万人、2005 年は 98 万人、そして 2006 年は前年比 10.5%増の 109 万人となり急増している。国内に十分な雇用機会がないことから、少しでも収入の良い海外に職を求めた結果である。

行き先の内訳は、2006 年分はまだ明らかにされていない。だが 2005 年は船員などの航海関係者を除いた 74 万人のうち、39 万人（53%）が中東に 行っており、特にサウジアラビアをはじめ、アラブ首長国連邦、クウェートなどが多い。オイルマネーによる活況が背景にある。また次に多いのがアジアで、約 26 万人（34%）であった。香港、台湾、日本行きが多い。こうした地域構成は、2006 年もほぼ同じではないかと思われる。

海外出稼ぎ労働者の増加とともに、彼らによる送金も年々増加している。金融機関を通じた 2006 年の送金額は前年比 19.4%増の 128 億ペソで、2005 年に続き 100 億ペソを超えた。フィリピン経済への影響も大きく、GNP の 1 割を占める海外からの送金は消費を強く後押し、経済成長の原動力にも なっている。またその額はフィリピンが輸出で稼ぐ外貨のおよそ 4 分の 1 に匹敵し、外貨準備高への貢献も大きい。

海外出稼ぎ労働者による送金が、家族を貧困から救っているという見方がある。確かにそうした側面があることは否めない。だが近年の傾向として、高学歴者の 海外出稼ぎが増加しているようである。つまりこれは、一定以上の教育を受けることができる高所得階層で海外出稼ぎ労働者が増えていることを意味する。例えば 2003 年の家計調査では、所得階層の上位 1 割強の世帯のうち、海外からの送金を主要所得源とする世帯数は 20%にものぼる。

海外出稼ぎ労働者の増加に伴い、社会問題も指摘されるようになってきている。頭脳流出、残された家族の崩壊、そして送金に依存する家族の労働意欲の減退などである。だが国内の雇用創出が十分でない以上、今後も海外に職を求めて出国する労働者が増え続けることに変わりはないといえるだろう。

2007 年 3 月